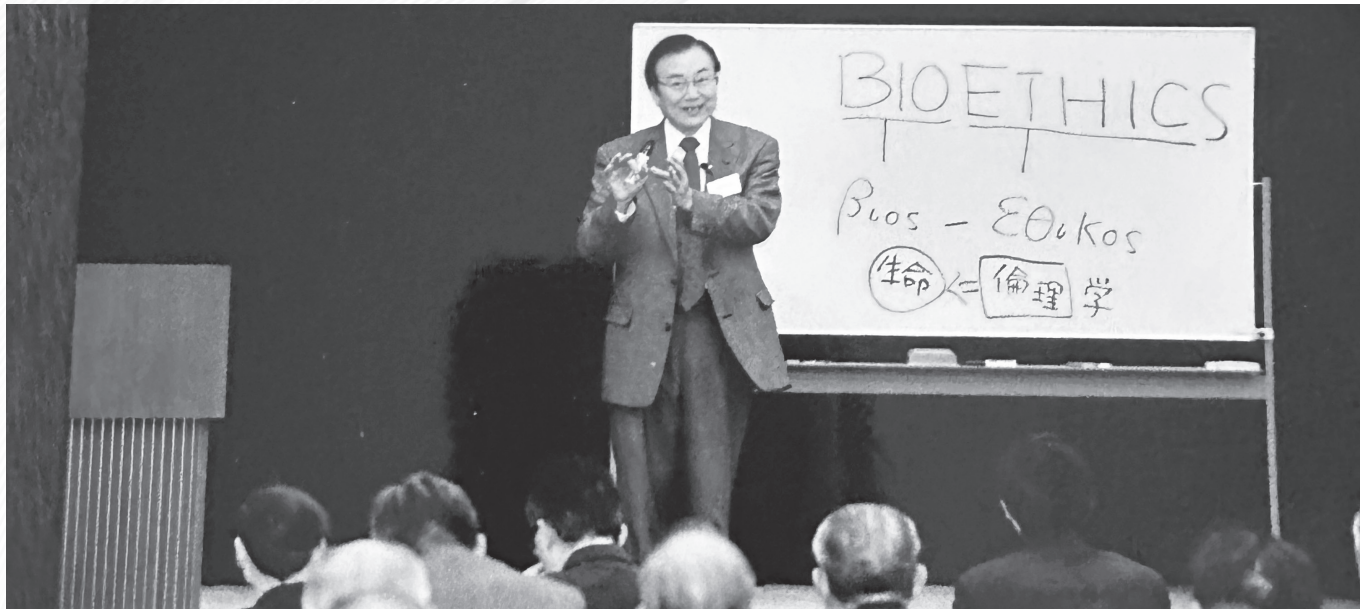


教育部門 受賞者

木村 利人

早稲田大学 人間科学部 名誉教授

「バイオエシックス」の国際的パイオニア 患者の権利確立に貢献



木村 利人
Rihito Kimura

早稲田大学
人間科学部
名誉教授
(博士・人間科学)

1934年東京生まれ。1957年、早稲田大学第一法学部卒業。1964年、同大学院法学研究科博士課程修了。1965年、タイ国立チュラロンコン大学アジア研究所・講師。1970年、ベトナム国立サイゴン大学・教授。1972年、エキュメニカル研究所(世界教会協議会/WCC)副所長、及びジュネーブ大学連携大学院・教授。1976～1978年、早稲田大学法学部・講師。1978～1980年、ハーバード大学・世界宗教研究センター(CSWR)・客員研究員。1980～2000年、ジョージタウン大学ケネディ倫理研究所・国際バイオエシックス研究部長・客員教授。1987～2004年、早稲田大学人間科学部・バイオエシックス担当教授。2006～2012年、恵泉女学園大学・学長。

推薦者 | 袖井 孝子 お茶の水女子大学 名誉教授

枯れ葉剤の惨禍の中で

半世紀前には存在しなかった「バイオエシックス」という学問分野を切り開き、そのパイオニアとして1970年代からWHO、UNESCO、厚生省などで、国際的に活躍してきたのが木村利人氏だ。「バイオエシックス」とは「Bios(生命)」と「Ethikos(倫理)」との複合語で、生命医科学や医療の発展に伴い生じる課題、例えば生殖医療や遺伝子操作、臓器移植等について、学問領域の垣根を超えた“超・学際的”な研究・実践である。

木村氏が“いのちを守る”学問の必要性を痛感した出来事に、軍事目的の枯れ葉剤による惨禍があった。1970年、ベトナム戦時下のサイゴン大学に赴任した時のこと、自宅に片腕のない男子学生が訪ねてきて、畑に枯れ葉剤が撒かれ、近隣に障がい児も生まれていると語った。枯れ葉剤は土壌に染み込み地域の飲み水や農水産物を汚染する。やがて生命の根幹である遺伝子に作用し、人間という存在を滅ぼしていく。実は、自分たちが「環境汚染の惨禍」の只中にいるという事実には慄然とした氏は、「生命に対する攻撃を見過ごすわけにはいかない。生物学や医学、法学、哲学などを一つにまとめた、命を守る学問を作る必要がある」と心に誓ったという。

同時期に木村氏は、緊急帰国して日本で尿路結石の手術を受けている。大学病院の担当医師から、目の前にいる氏には詳しい説明もなく、ずらりと並んだ医学生へ講義する過程で手術が決まった。再発時に米国で手術を受けた際は、患者の理解度を確認するなど“インフォームド・コンセント(以下IC)”が徹底されていた。こうした体験が、患者の権利確立に奮起する契機となる。

命を守る学問が着実に根付いていく

ちょうどその頃、米国では「医師の言うままに自らが参加しない

形の医療を受けていてはいけない。自分の命は自分で守る」という患者の権利運動が起こっていた。木村氏はスイスや米国などでのバイ

オエシックス活動を日本で展開するため、1980年と1981年には、全国各地の医師会、看護協会、医科大学、病院、医療消費者グループ、ホスピスを含む約30カ所で、IC概念の紹介など、バイオエシックス教育セミナーを開催した。その後、「病院」誌や「看護学雑誌」でのバイオエシックスをテーマにした年間連載は、当時の日本の医療に大きなインパクトを与えた。この活動の初期段階では「法律家が医学に口を挟むとは何事か」など批判もあった。しかし、全国各地の新聞がこの活動を取り上げるうち、徐々に風向きが変わっていく。1997年の医療法改正では、ICが努力義務として明記された。木村氏は、厚生科学審議会委員、医師試験委員として活躍する一方、東京都病院倫理委員会委員長として地方公共団体で初の「患者の権利章典(2001)」を策定するなど、医の倫理を問う活動は着実なうねりとなって広がっていった。「バイオエシックスの中心思想は平和である。決して戦争をしないことが念願である」と木村氏。半世紀前に氏がめざした地平は、遥か彼方まで広がっている。



1972年、スイスのエキュメニカル研究所・副所長に就任。委員長として「国際バイオエシックス会議」を主宰するなど、国際的なキャリアを築いていった。



1959年、大学院生だったときに国際ボランティアとして訪れたルカオ小学校を54年ぶりに再訪。木村氏が生んだ「幸せなら手をたたこう」を一緒に歌った。